

I. 日本教育大学協会全国教育実習研究部門第25回研究協議会 報告

理科教育講座 平野俊英

標記の会が平成23年10月14日（金）に香川大学教育学部研究交流棟にて、36大学から約70名の参加者を得て開催され、本部会から後藤（養護教育講座）と平野の2名が参加した。昼休みの部門理事会・総会を挟む形で、午前に4件、午後に5件の計9件、9大学からの教育実習の改善に関する研究発表が行われた。以下に研究発表の概要を紹介する。

発表①：香川大学「教育実習生のための教育実習自己評価シートの開発」

附属学校との共同研究として2008年に着手、2009年から試行継続中の自己評価シートによる教育実習生の省察活動の導入効果を発表された。自己評価シートは「教育実習全般」（41項目・5件法による意識回答）と「授業作り」（4段階基準との適合を回答）の2種を用意している。指導教員の評価観点項目とそろえており、指導に効果が見られていると報告されていた。

発表②：岡山大学「理論と実践を往還するリアリスティックアプローチの実習効果—新卒院生の課題発見実習を中心に—」

教職大学院での新卒院生向けに設けられた、地域協働学校における課題発見・解決型の教育実習について実践報告がなされた。院生の実践研究の希望にマッチングさせた協力校で、大学教員の訪問指導を受けながら、本人が定めた研究課題の解決をアクションリサーチとして行っていく教育実習アプローチである。大学の講義「教育実地研究」でチームによる省察活動を並行して実施することで効果を引き出そうと、検討を継続されている。

発表③：新潟大学「新潟大学教育学部における4年間の教育実践カリキュラム」

教員養成フレンドシップ事業推進室で運営される学部の「入門教育実習」「学習支援ボランティア」の実践報告がなされた。前者は1年次に半分強の学生が参加して年に3回、附属学校園や近隣の公立学校園で教育活動へ参加・観察を行ったうえで報告会で学習成果発表を行うものである。後者は、新潟市教育委員会との連携協力事業として4年次の学生100名前後を週1回半年間程度、ボランティア派遣して、活動を単位認定するものである。

発表④：兵庫教育大学「学部教員養成課程における学習指導に関する実践的指導力形成の成果と課題—新卒5年未満教員の資質能力に係る第三者評価の調査結果に基づいて—」

学部卒業後5年未満の兵庫県内の現職教員を対象にした実践的指導力の育成成果の調査報告がなされた。「指導での児童生徒との対応能力」「教科学習指導の実践能力」「指導における保護者・地域の方々との対応能力」を調査したが、実地教育科目の履修が基礎的な資質能力の形成に貢献していたものの、現場ではより高度な実践的指導資質能力を求めている、より積極的な同僚・保護者等との働きかけが要求されていたことが分かった。

発表⑤：愛媛大学「資質能力の育成と点検—省察とポートフォリオの取り組み—」

学校などの教育機関からの依頼に基づいて支援活動を行う、学部での「地域連携実習」における省察活動について実践報告がなされた。学習を振り返り、習得した資質能力を点検する機会として、年度に1回のリフレクション・デイを設けて、自己評価や実習でのリフレクションシートの点検を行わせるとともに、教職コーディネーターから助言を与えるようにしている。

発表⑥：大阪教育大学「授業研究を取り入れた『省察する教師』を養成する教育実習の開発―附属平野小学校のリフレクションの概要―」

教育実習におけるリフレクション・プログラムの構築、さらにはその中でのカンファレンス方法の確立を目的に研究がなされている。実習生同士の相互協力で授業実践とその VTR 録画が行われ、それをもとに自己評価（診断的カンファレンス）、他者評価・相互評価（形成的カンファレンス）を展開して総括的な省察を実施している。後者の効果的な実施が課題である。

発表⑦：信州大学「体系的な臨床経験科目におけるリフレクション指導の検討―教科専門教員と教科教育教員の連携に着目して―」

学部1年次前期の「教育臨床基礎」「地域教育演習Ⅰ」での臨床経験を踏まえた上で行われる、グループ発表形式の「リフレクション演習」についての実践報告がなされた。主にはリフレクションの意義と方法の理解を主眼にしており、12あるクラスの担任大学教員チームの連携のもとで実践試行が展開されている。教職実践演習への基盤作りにもなっている。

発表⑧：山形大学「山形大学における教育実習改革について」

山形大学の全学での教育実習改革について、実践報告がなされた。非教員養成学部でも母校実習を取りやめ、山形市内の附属学校園や協力校で実施する形に変更がなされている。しかし、協力校として山形市内のJR沿線の学校園を確保したとはいえども、通勤手段の確保や他大学の母校実習との棲み分け、大学教員の意識改革など、今後の課題がある。

発表⑨：高知大学「体験型実習授業における省察のあり方―振り返りシート『まなびフォーリオ』の分析を通して―」

学部2年生対象の中山間地域の小・中学校での学校行事支援を内容とする「支援実習」について、振り返りシートの記述分析から省察事項について検討された実践報告があった。学生は子ども・教職員・地域の人々との関わりに注意を傾けて学びを記述しようとしているものの、具体的な関わり・行動の内容を示した記述は十分にはないことが得られた。記述内容の指導等に今後反映させていくようである。

以上のように、教職実践演習の導入を目前にして、教育実地研究の質的向上を図るために到達目標やそれに基づく自己評価・リフレクションの導入、教育実習機会の拡大・地域との連携協力のために学校支援ボランティアのカリキュラム化などが進展してきている。

Ⅱ. 平成23年度「主免実習」における「3週+1週」方式の試行に関する反省・意見のまとめ

養護教育講座 後藤ひとみ
学校教育講座 松原信継

本学の新たな教育改革では、小学校教員と中学校教員の2枚免許状を取得して卒業させるという教員養成が検討されており、従来の主免実習4週間と隣接校実習2週間という実習期間をそれぞれに振り分けて3週間ずつの教育実習とすることが考えられている。

そこで、附属岡崎校の協力を得て、試行的に「3週+1週」の主免実習を行った。ここでは、教務課が中心になって実施した事後調査の記載内容のから、3週間実習などを考える際に参考となると思われる意見を整理したので報告する。

1. 4週間実習を「3週＋1週」方式で行ったことへの全体的な感想・意見

- ・3＋1という期間の区切り方も総合実習という実習生が主体的に考えて動くことができ、意味があった。
- ・授業だけでなく、様々な学校の教育活動（運動会や生徒総会）から、子どものようすを観察することができるのでよいと思った。4週目の教育実習生が、生き生きとした表情で実習を行っていたと思う。
- ・3＋1という区切り方は、＋1を総合実習としたことで、実習生が1日担任として考えて動かなくてはいけなくて意識して過ごすことができてよかったと思う。
- ・授業単元をコンパクトにし、目標を絞り込むことで3週目での研究授業にも十分対応することができた。研究授業を終えた4週目は、担任として学級・学年を見据えた自覚ある行動が見られるようになってきたと思われる。
- ・総合実習は非常に有意義であった。担任としての自覚を生むという意味でも、総合的に学ぶという意味でも、様々な取り組みができた。3週間の実習では、単元を終えることに必死になり、こういう学びができないのではないかなと思うと少しもったいないと感じることもある。1週目から授業に入るくらいの勢いでないと、単元を終えることすら難しいのではないかなと思う。
- ・＋1が研究授業単元のまとめになってくることは仕方ない。3のなかでやりきれないし、自分の単元はやりきらせたい。＋1の週で自分の単元もやり、算数や体育など、自分の教科以外も実習できたので、＋1が後ろに来ることに意味はあった。ただし、3になったときには、他教科の実習はなかなかできないと思う。
- ・研究授業までの日程が短く、特別研究授業のからみもあり、研究授業の単元を進めることに苦しんだ。
- ・総合実習となったことで、実習生にまかせる部分はあるが、逆に自分の単元（ほりおこし等）の時間がうまく生み出せないのが現状である。
- ・＋1は最初にあった方が慣れる場ができるが、将来的に3週間となった場合、運動会の日からのスタートは外せないと考え、最後に＋1にする方法がよいと思う。

2. 4週目を「＋1週」として位置づけたことについて

- ・＋1の週に、他教科の授業を行うなど、幅広い実習ができた。子どもたちを引率する機会として校外学習にも出かけることができ、校内とは違った実習ができ充実した1週間になったと感じた。今回の＋1は、総合実習の回数を増やすことができて、自分が担任であるという自覚を高めることができ、価値ある＋1になった。
- ・4週目は、実習生が主体的に動くということが非常によい経験になったと思う。担任として、または、学年としての意識を行動に移すよい場面となった。
- ・最終週が総合実習期間と位置づけることができ、最後の1週を3週間で学んできたことを、子どもに寄り添い実践しまとめの教育活動を行うことができ、実習生の成長を確認することができた。
- ・総合実習としての期間が長くとれ、担任としての経験を積む機会が十分もてたのではないかな。
- ・4週目には子どもとゆとりをもって向き合う時間が確保でき、実習生にとっても教職そのものについて考える機会がもてた。
- ・総合実習で1週間あったことは、3週間の学びを生かし、力を発揮する応用的な実習になったと感じた。他学年を見に行ったり、他教科の授業実習を行ったりと幅広い学びができたと思う。
- ・総合実習は主体的に実習生が動く場を与えられ、価値があったと思う。また実習生一人一人が、担任という自覚をもって実習ができたのが総合実習の1週間だったと思う。
- ・＋1の総合実習では、担任として活動し、他教科の指導もしたりすることで、小学校の教師の仕事について学ぶことができたと思う。
- ・授業づくりを学んでおいて、最後の総合実習で専門教科以外の授業に取り組めたので、実習生も教材研究した後、落ち着いて授業に取り組むことができた。

- ・3＋1という期間の区切り方も総合実習という実習生が主体的に考えて動くことができ、意味があったと思う。
- ・3週目までに研究授業を終えたことから、自分の教科だけに集中していたところから担任として様々な仕事があることに気づくことができたと思う。3週目までの実習を振り返り、いろいろな面からとらえるという点ではこの実施日程でよかったと感じた。また、3＋1という期間の区切り方も総合実習という実習生が主体的に考えて動くことができ、意味があったと思う。
- ・3の後に＋1があることで、実習生にとって主体的に取り組む場であるということが意識でき、積極的に保健室で子どもたちと関わる姿が見受けられた。
- ・実習生にとって、3＋1になったからということで、価値は変わらないと感じた。
- ・3＋1あっても指導案を4部提出と変わっていないので、授業作りから学ぶ主眼実習として、単元で2部制作には苦しさがあった。1部で十分である。
- ・3週間になった場合、総合実習をどのようにするか考えていく必要があると思う。ほとんど自分の教科の授業だけになってしまうと思う。
- ・プラス1のところで、授業以外の学校の活動として、今回やった学力テストのような実習ができるといいと思った。（岡崎城へのペア遠足をしていた学年のようなものなど）

3. 指導教員としてのかかわりについて

- ・「総合実習」ということが頭の片隅にもあり、実習生に任せるということを自分自身も意識して指導に当たれたと思う。
- ・＋1の1週間のおかげで単元をやりきることができた。
- ・他学年を見ることで、発達段階の違いを感じさせることができた。また、総合実習で思い切った実習も行うことができた。3週間では単元を終えることは苦しいが、総合実習で指導に当たれたと思う。
- ・＋1で自分の授業（ほりおこし）が予定できることがありがたかった。研究授業が終わっており、単元の終わりの見通しもあるため。個人的には、3人の実習生にいただいたおかげで、＋1で3人それぞれに他教科の授業実習を複数させられたことが大きかった。
- ・3週目までで単元を終わらせるのはやはり大変であった。特に低学年で特別研究授業を行う学級は、残りの実習生の単元を3週目までにやり終えることは難しいと思う。事前打ち合わせの際にどこまで先が見通せるかが大切である。
- ・3週目までに研究授業して総合実習をするのは、なかなか大変なように思う。事前の準備がしっかりされていないと3週で実習をこなすことは難しい。新しい実習生のトレーニングプログラムが必要と感じた。
- ・3週目に総合実習の意識と研究授業を2回目のかかわりで見せることを考えると、2週目には初めのかかわりの授業を組んでいく必要がある。そのためには、1週目から研究授業に向けての授業をスタートしないと、実習生に授業のイメージや考え方を伝えきれないと感じた。
- ・3週で単元が終わらず苦しかった。課題解決であれば時間数は少なくとも大丈夫だと思っていたが、私自身が課題解決の見通しが甘かったと反省している。
- ・指導する立場から言えば、4週間での内容を3週間でやるわけだから、3週間で内容をより充実させていかなくてはいけない。だからこそ、より見通しを持っていかなくてはいけないと感じた。
- ・ゆとりがなかった。担任として業務を伝える、学びの場を提供しきれなかった。
- ・＋1の週間までに教育実習生の研究授業の単元が終わることの苦しさがあった。それを解消するには、スタートを早めることと、教師自身が見通しをしっかりとつこと。今回は、見通しがもてていなかったと考える。事前に単元は決めていたのだが、課題解決が見えていなかった。
- ・3週までに実習生の研究授業の単元を終わることができなかった。教師が見通しをもち、第1週目から授業を始めるなどしなくてはならなかったと思う。

- ・勤務の関係から（実際には深夜にメールでの制作、早朝の印刷）で、研究授業への指導が中心で、総合実習としての指導まで手が回っていない。講師授業も多いので、なかなか組めないのが現状であった。

4. 3週間で一区切りにしなければならなかったことについて

- ・総合実習と言いつつ、研究授業単元をこなすことで精一杯であった。
- ・3週目には次週の総合実習という自覚を持ちづらいつと感じた。研究授業のことで頭がいっぱいになってしまって、担任としての自覚が持ちづらいつ。特研の子以外の実習生は、研究授業が1回目のかわりの授業になってしまった。2回目なら、ある程度イメージを持ったり、準備が必要なことも分かるが、初めてだったため余裕がなかった。最初のかかわり合いを2週目にやっておくと、3週目に研究授業があつても、総合実習の担任としての自覚をもって実習をすることができると感じた。
- ・日々の授業準備に追われながらの総合実習になってしまい、実習生の意識がどうしても研究授業モードになっていた。
- ・4人の実習生がいて、課題解決学習でかわり合いの授業を設定していくためにはやや厳しいつと感じた。実際に3週目には、総合実習的なこと（他教科の指導）にむけてほとんどできなかった。自分の教科を指導するのみになり、小学校実習としてはどうかと感じた。
- ・3週目からは実習生の意識が授業中心になっており、総合実習という意識にやや欠けた面があつた。
- ・研究授業が3週目に入ってくると、それだけの準備に追われてしまうので、総合実習の内容もそうだが、授業記録をおこすとかが終わってからの作業になってしまうと思う。
- ・3週目に実習が終了するのは実習生にとっては楽であると思うが、学びは確実に少なくなると思う。単元をやりきるといふことも難しくなるので、授業が中途半端になってしまうことを危惧する。研究授業が始まると、自習が多くなる中での総合実習は、心もなかなか落ち着かないのではないかなと思う。
- ・授業研究を行いながらの総合実習は難しいが、3週間の実習内容を考えると、並行して行うしかないと感じる。
- ・他クラスの研究授業の参観（10コマ）、講師授業のコマを考えると、なかなか総合実習を組み込んでいく枠が取れないのが現状であつた。
- ・とても苦しい。1日に3時間は研究授業をみる附小の養護実習生は、総合実習として保健室にいる時間が少ないだけでなく、研究授業に遅刻しないようにするために、来室者の多い放課の保健室の状況を見届けることもできなかった。現状のままで、3週目で実習が終了となれば養護実習とは言えない実習になってしまうと思う。
- ・3週目、研究授業の終わった実習生から順に、一日主担任で行つたが、研究授業や他の実習生の授業の参加などでなかなか子どもより先に指示を出すことが出来ない状況だつた。
- ・研究授業が中心になる。研究授業が終わつた実習生から総合実習になっていくことはできると思う。
- ・いきなり1ヶ月の実習というのは、学生にとっては確かにきつい。よく考えてみたらそれが当たり前での状態でやつてきた。しかし、きついといふことを分かってもらうことが大事であるし、たつた1ヶ月であつてもやりがいを感じている実習生が多いのではないかな。その点から考えると、短くなった分、もう少しやりたいといふ実習生もいるかもしれないが、3週間でも充分やつていけるといふことが今回の実習でもわかつたと思う。
- ・やはり指導案作りやその研究授業のための時間の使い方で追われているので、あまり総合実習といふことにはならないと思う。
- ・実習生が授業実習のことでなかなか手一杯のところ、担任業務の至らなさに対する指導が増えた。こうならないような2週目までの過ごし方が必要だつた。

- ・単元をやりきらせることも大切な学びであると考え。となると、総合実習との並行が大変難しくなると考える。
- ・1週目に実習生の授業がスタートできれば、2週までに研究授業を終え、3週目は総合実習のみという形もとれると思うが、指導講話や観察授業の数を考えると、やはりそれは難しいのではないかと。
- ・実習生が3人であっても、総合実習らしいことはできなかった。結局、研究授業単元の時間を確保することが中心になっていたため。将来的に人数が減れば、他教科等も指導しつつ、自分の研究授業単元を行うこともできると考える。ただし、そのためには、早めに単元を決定し、単元構想を作り上げないと、自分の教科と他教科両方の教材研究が重なり、実習生がパンクする。
- ・3週の実習期間を前提にするならば、3週目の研究授業を見に行くのは一日担任は外して、一日子どもの相手を朝から帰りまで責任もってやった方がいいと思った。
- ・総合実習と研究授業を並行して行い、3週目で実習が終了するとあわただしく実習が終わるような気がする。今以上に、見通しをもって指導に当たる必要があると思う。
- ・研究授業と総合実習を並行して行うことになるので、見通しを持って指導し、早めに授業がスタートできるとよい。
- ・1週目に授業スタートができるとよいと思うが、指導講話と重なり、時間の確保も厳しい。
- ・総合実習としての意識を2週目から段階的に指導しておくべきであった。研究授業だけにとらわれないようにさせたい。
- ・1週目から授業実習は無理なので（観察・参加も大切）、仕方がないと思う。

5. 「3週＋1週」における4週目の実習について

- ・学生が担任としての自覚を持つことができて、変化の大きかった1週間だった。
- ・これは非常に有効だと感じた。担任として、または学年としてという目で子どもを見て、実際に指導できるよい場面であったと思う。
- ・担任として主体的に子どもたちに向き合い、行動する姿が見られた。3週目で研究授業を終えていたことも大きかったと思う。
- ・主体的に取り組むためには教師が如何に実習生に取り組むための指導を事前に行うか、その日のうちに次の日の改善点などをあげていくかが大切である。そういった観点から考えると、実習生の取り組みは自分たちなりに考えた行動であった
- ・よかったと思う。今までの学びを生かしていた。また、子どもとの信頼関係もできてきているので、総合実習がより主体的にできたと思う。
- ・担任という立場で動こうとする姿が見られた。子どもに対する声かけや態度も4週目に入って毅然としたものへと変わったような気がする。
- ・担任としての責任を感じ、主体的に取り組む実習生が多かった。そういう点では、価値ある総合実習だったと考える。
- ・3週間の実習を通して学んできたからこそ、実習生の生き生きとした表情が見られたと思う。4週目があるなら、3＋1の実習の形式がよいと思う。
- ・自分が主体となって行うということを意識して取り組んでいた。目的が位置づけられていたことで、より意識して取り組めたと感じた。
- ・自分たちの教科ではない算数と体育を任せた。算数については、自分で教材研究をし、教具等の準備もしてきた。また、体育は3人で役割分担をし、時間を上手に使って行えた。意欲的であったと感じた。
- ・主体的に専門教科外の実習が組めた。授業作りの視点から、かかわり合いを深める教師の出（？）や板書の構成など授業研究が生かされ、さらに深まったことは間違いない。
- ・授業だけでなく、担任という立場で学級を見ようとする事ができていた。スポーツテスト、校外学

習など、集団を動かすことの実習も行え充実した内容であったと感じる。

6. 今後の教育実習にむけて

(1) 提出物について

- ・研究授業の指導案の職員配付を簡素化したい。
- ・研究授業の指導案配りをかごに出すだけにする。
- ・「教育実習記録」の週予定や毎日の実習記録などをデータ化できないだろうか。実習生が少しでも楽になると感じる。
- ・授業記録は特研のだけでいいと思う。略案についても3週になった場合、ない方が研究授業に打ち込んで準備ができる。
- ・指導案は特研と本時案、道徳の3部にできるとよいと感じた。また、観察、参加記録についても簡略化できるとよいと思う。
- ・確かに負担は大きいですが、書類・事務とも今以上に軽減をすることは難しいかと思う。いかに見通しをもって指導に当たっていくかが求められていると思う。
- ・実習生のテーブル起こしの時間をなくす。

(2) 評価の観点などについて

- ・現在のものでもいいと思う。できれば、実習生個別の評価用紙にある指導教員の名前や実習生の名前をパソコンで打ち込める（成績を書き込み、指導教員の朱印だけを押印すれば良い形にする）といいと思う。
- ・評価基準がはっきりしないので、学年での共通理解が必要。
- ・「学習指導」の「教材研究」と「授業への情熱と工夫」が混同してしまいがちだと思った。また、「生徒指導」の「指導態度」と、「実習態度」の「協力と奉仕、人間関係」も混同しがちだと思った。
- ・生徒指導の教室環境整備という項目と実習態度の協力と奉仕の項目の区別がつきにくいと思った。学習指導の教材研究（創意）と授業への情熱と工夫のところもどのような違いが分かりにくいと思った。
- ・「教養、品位の高さ」が評価しづらく、難しい。
- ・「授業への情熱と工夫(取り組み)」が学習指導全体の内容と重なる部分が多く判断に困った。「協議会での発言」については内容と意欲とでは判断が変わってくるので、内容だけでもよいと感じる。
- ・やはり毎日どのように指導してそれが出来るようになったから出来ないからという観点で評価しなければいけない、何も教えていないのに、変わらないでは指導したことにならないし、最終的に指導したことができるようになり、変化したからと言う視点で見えていかなくてはならない。実習生一人一人をAにするつもりで指導しなくてはならない。

以上の記述内容から、試行的に行った「3週＋1週」方式は、4週間実習を前提とした方法としては好評であることがわかった。特に、「＋1週」を総合実習としたことで、実習生の学びが深められる機会になったことが確認できた。しかしながら、そのための前3週のプログラムが重要であり、従来は4週目に行っていた研究授業を早めなければならないこと、4週目の総合実習にむけた準備を3週目にはしなければならないことなどが大変との指摘がなされている。また、「3週＋1週」方式に対しては肯定的であり、4週目（＋1週目）の位置づけは評価されたが、単なる3週間実習になることについてはほとんど意識されていない様子も捉えられる。よって、今回の試行結果は、4週間実習を「3週＋1週」方式によって充実させるということについては大事な所見を得ることができたと考えるが、3週間化については十分な根拠を得たと捉えることはできない。以前から指摘されてきた教員一人あたりの実習生数が負担であるという現実は変わっていないことがわかる。

教育実習の質を維持しつつ、学生にとってのより大きな学びの場を提供する一方で、指導にあたってくださる教員の負担を少しでも軽減するためには、提出物の検討を含めて、斬新なアイデアが必要ということである。今後も、附属学校の先生方のご意見を参考にして検討を重ねていきたい。